

### 第3回生田緑地マネジメント会議準備会 議事録

開催日時 平成24年1月18日(水)18時~20時30分

開催場所 多摩区役所11階会議室

出席者 (別紙)

議題 第1部講演会 愛知県の公園マネジメント会議について  
第2部準備会 運営ルール作成に向けて

あいさつ

(小川コーディネーター)第2回には、かなり深い疑問や意見が出された。今日はそれを受け、日本で初めてマネジメント会議を導入した愛・地球博記念公園で、実際に推進している愛知県公園緑地課の方、その中で参加、活動している方に来ていただき、先行事例として話をしていただく。これは基本的に愛知モデルであり、先行してやられた経験談を通じて学べればと思う。公園マネジメント会議を導入する公園は、生田緑地が成功すれば2例目である。市民をエンジンとした公園が連携していくことで大きな時代のパワーになると思う。愛知モリコロパークとも、公園間の連携をしていくことが良い。さらに、市民の方達が交流する機会にもなると思う。

配付資料確認(事務局)

講演者紹介(事務局)

事務連絡(事務局)

第1部 講演会

講演「愛知県の公園マネジメント会議について」

(粟田講師)本日は、愛知県記念公園、モリコロパークの公園マネジメント会議の成り立ち、仕組みについてご紹介したいと思います。

「世界にひとつの新しい都市公園づくりに向けて」ということで、愛知県記念公園の名前の通り、2005年の愛知万博にちなんで新しく都市公園として生まれ変わった。そして、2006年7月、博覧会の理念と成果を引き継ぎ、都市公園として誕生したのがモリコロパークである。

基本方針は4つ。 博覧会の理念と成果を継承する都市公園。 新しいニーズに対応し

た都市公園。 青少年公園の歴史を活かした都市公園。 多様な自然環境を育む都市公園。  
以上の4つの基本方針を定めて公園整備を進めてきた。

整備活用の方針として、健康で精神的な豊かさと楽しさに満ち、県民と共に成長・進化し続ける21世紀型の公園ということで、サステイナブルパークを目指すということを位置付けている。県民と行政とのパートナーシップによる公園整備と管理運営という目線では、様々な段階での県民参加の推進や公園マネジメント会議の設置、ボランティア活動の推進や県民が主体的となる管理運営への段階的な発展ということ位置付けている。

次に、簡単な経緯を説明する。2004～2005年に博覧会開催。2005年3月25日から9月25日までの185日間、愛知万博があった。そのあと、前後しながら、公園の基本計画を21世紀にふさわしい公園づくり委員会、万博の後にその成果をきちんと計画に組み込むために検討委員会と一緒に立ち上げている。その後、公園マネジメント会議の設置が計画上位置付けられた後、2007年に準備会でマネジメント会議のルールを話し合いながら決めていくことに1年ほど時間をかけた。そして、実際にスタートしたのが、平成21年3月22日で、2年半ほど過ぎたところである。

会議の目的は、「県民と行政のパートナーシップにより、公園利用者の満足度向上等を目的に、利用者の目線で公園の管理運営を行う協議・実践の場」として表紙に掲げている。これは、常にこの言葉を忘れないようにするため、表紙に掲げることを当時のメンバーで決めていただいた。自分たちに都合の良い行政目線であったり、NPOの方たちも自分たちの活動しやすい活動目線で無意識に捉えがちになる場合があるが、利用者の目線という言葉掲げること、常に自分たちに自戒させながら進めていこうとしている。

県民と行政のパートナーシップとは、県民と行政が共に手と手を取り合う、イコールパートナーという目線を常に忘れないように取り組んでいる。

会議の構成者は、基本的には一般公募。現在は年に1回、一般公募をかけている。私達のマネジメント会議は、個人の県民の方は、会員として募集要項に定めていない。団体もしくは大学の先生の場合は個人の研究単位の形もあるので認めるというかたちで、NPO、ボランティア団体、企業・大学研究機関、行政指定管理者という形の多様なセクターの人間が一堂に会して会議を行っている。会員のメンバー構成の編成としては、現在は74会員、21年から22年には13会員、22年から23年は9会員増えた。合計数が合わないのは、辞められた会員がいるためである。NPOの方が74会員のうち59会員ということで過半数を占めている。

会員には任期を定めていない。承認を得る等はしていない、完全ボランティアである。毎年3月が終わるとアンケート形式で継続の意思確認を行っている。引き続き会員として活動に貢献していただけるか、退会するのをお聞きする。つまり会員になるには、公募をかけ、マネジメント会議において承認となる。行政では承認せず、会議メンバーにて選んでいただく。会員を辞める場合は、自由意思で退会を行っており、承認は行っていない。会員の思いでマネジメント会議が成り立っているというスタイルである。

生田緑地のマネジメント会議にも、管理・整備・運営という3つが書いてあるが、モリコロパークのマネジメント会議は、主に運営の部分の、各種活動、運営プログラム、イベント運営について取り組みを範囲とさせていただいている。実際の会議としては、総会とコア会議があり、コア会議は自ら立候補された30名程度の会員で行う。

公園管理事務所内と公園緑地課が協働で事務局を行っている。会議では中立的な立場としてコーディネーターを配置している。実践の場としての分科会であったり、1年の活動をマネジメント会議自信が評価する仕組みで評価委員会を定めることもしている。

会議では、総会や会員からのアイデアを引き出したい時には、いくつかのテーブルに8人程度で別れて議論しながら物事を進め、アイデアを深めていきたい場合は、円卓のテーブルに自由配席で座っていただき、お話をさせていただく事をしている。

協議内容は、基本的な管理事項、運営検討各種活動検討、その他という大項目に別れ、そのうちの実際の定型的な決めごと以外のものは、通常の公園の利活用促進ための活動提案、利用者満足度向上の対策、情報発信や広報、PR活動について、皆さんと議論しているケースが多い。

例えば平日の利用者の拡大についてみんなで考えてみようという事を行った。1番最初に取り組みうと決めたことは、モリコロパーク自身の健康診断。

その他、学校と連携した校外学習の場づくりに公園を使ってもらう為に会員自身で仕掛けていこうという話であったり、どこから来ているお客さんが多いのか、どんな世代構成の方がどんな割合で来ているのか、活動サービスをするにあたっての、いわゆるマーケティング調査というものをマネジメント会議で行うということを取り決めたりしていた。

実際に校外学習の場づくりということで行ったケースとして、今日一緒に来ている浜口氏が活動しているもりの学舎での学習プログラムを、国際交流という事で留学生に外国の自然と公園の自然について感じたことを話し合ってもらった。また、アンケート調査というものも実際に行った。また、新しく昨年10月に地球市民交流センターという交流施設を用意し、運営計画のようなものをマネジメント会議でも利用した。例えば、NPO企業と協働で学校の団体向けのプログラムを実際に開発したり実施したりした。実際には1年間で85団体、約7000人にそうしたプログラムを利用していただいたり、NPOの方々等が利用しやすい環境を整えてあげるということで、お客様の利用者サービスに向けたプログラムを実践したことで、部屋代や備品代は無料で提供させていただくパートナーという登録制度を、実際にマネジメント会議の意見交換をヒントに定めたりしている。

それ以外にも、色々な活動提案等を自分達でやっていこうと議論している。昨年度は情報発信や食や環境エネルギー等の話も皆さんとアイデア交換を行った。また営業ツール、営業の道具をみんなで話し合うとか、地球市民交流センターのビジターセンター化といった話も出てきた。そのような話を意識しながら、具体的な成果が出るように1年間活動を取り組んでいただいた。行政が何かしてくれという話ではなく、みんなの1年間の行動計画が、こういう目線を持ちながら活動していくといいと自分自身で決めていただく、そう

いう仕掛け方をしているのが最初のころである。実際にやったこと、やれてないことを見る化し、言いつ放しにならないように皆さん自ら働きかけようと、事務局として働きかけている。

また、最近 2 年半を過ぎ、実際の利活用促進の問題を多く行ってきたが、マネジメント会議ということ自体、どのような印象を持っているかを振り返る機会を設けた。結果、「いけている」というところでは色々な出会いがあり、活動が広がったという意見、利用者目線ではなく主体者目線であることができたという意見があった。つまり、ゲストだった方がホストの目線で出来るようになった。また、指定管理者から出た意見として「利用者目線になれた」という話があった。管理の話だけでなく、皆さんとお付き合いすることにより、利用者の目線で考えられるようになってきたとおっしゃっていただいた。自分の立場もありながら、相手の立場も成り立って物事を見られるようになったとおっしゃっていただいた事が、2 年半経った時点での「いけている部分」かと思っている。

逆に「いけていない部分」についてである。議論の結果やアイデアの実効性や実現性を高めていく仕組みについて議論しよう、話題が出たことに実効性を持たせないといけないし、それがどういった形ならば実効性をもつのかということについて、話し合おうということである。

公園管理体制の役割分担などの全体像を明確にする、このことは、生田緑地もそうかもしれないが、うちも色んな施設があり、そこに関わる複数の管理者、うちの場合は施設にひとつくっついているので指定管理者が 2 つあったり、運営者が別にいたりということがある。そういった役割分担を分かるようにしよう、組織に関する本質的な議論を行おうなど、情報発信をもっとスピーディにやってくれとかそういった話が多く出ている。

現在 11 分科会が活動中である。分科会というのは複数のメンバーが共同で取り組む内容で、個々の会員が活動できない訳ではない。3 月 11 日に地震があったが、それにインパクトを与えられ、何かできないのかと会員から発言があった。モリコロパークの解決にはならなくても、僕たちの力で何か出来るのではないかと言うことで、例えば「樹木でよみがえれ、被災地の緑分科会」というのがあるが、これは東北のどんぐりをいただいて公園で育てて、2 年後くらいにお返ししよう、その想いを届けようという取り組みである。実際にどんぐりは蒔かれ、岩沼市とも現在つながっている。そういったことも、行政と NPO が協働でやると同じ相手のターゲットもつながることが出来る。また、自らモリコロパークに地震が起こった場合、NPO で活動している人たちがお客様に対する危機管理を誰が担うのか。自分達が避難口に逃がしてあげるまでは自分達でやらなければならない。そういった事のシミュレーションを「緊急時に備え実習分科会」ということで危機管理も行政に委ねるだけでなく、自分達でも考えようということをやりはじめた。ダイレクトではないが、このような分科会もマネジメント会議の分科会の特徴だと想っている。

応用だが、池における水質底質分科会は、公園の中にある 11 個の溜池について、行政は定期的に水質調査出来ない為、メンバーの近隣の大学の先生が大学の研究テーマと合わせ

て定期観測を行いたいと言うお話があり、それに対して分科会を設立した。

長久手の森プロジェクトという森づくりのプロジェクトは、会員の取り組みとして緑地復元などもやっていただいた。それ以外でも公園内に施設を作ったり、色んなイベント等をすべて会員のミッションでやっていただいている。

評価委員会は 5 名程度のメンバーを選出してやっているが、自分自身の評価をアンケート形式で実際に評価していただいている。

そのような取り組みを「新しい公共」のモデルになるのではないかと踏んでいる。きめ細やかなサービスの提供に繋がったり、利用者の満足度向上が魅力ある公園づくりに繋がっていくという事を心がけている。そのような取り組みにしても、会員が色々な所で話してくれるので、新聞に掲載されたりする事もある。

気をつけているポイントを幾つか紹介すると、マネジメント会議を進めるにあたって、目的目標の共有であったり、会員相互の理解であったり、行政と NPO がイコール対当な関係の目線で会議に臨んでいただいている。また、透明性の確保、情報の公開、評価の実施、会員のキャラクターへの理解と配慮など、会員個々のしたい事を我々も理解する部分と、その取り組みに対して実現していくためにどうしたらいいかといった配慮が必要であると考えている。

さらに、公園の管理運営を担っていくという自覚と責任も必要である。

最後に、協働で進めていく上で感じている事で、事務局を通じてお伝えしたいことは、生田緑地のオリジナルのスタイルを見つけていただく事になるが、この機会を逃さないでいただきたいと思っている。

会議の主役は行政でも指定管理者でもなく、皆さんである。すべての会員が主役であるという視点が必要と考えている。そして、会員が互いに繋がることで、1 人では出来なかったことも実現できるという思いが必要であると思っている。

簡単でありましたが、マネジメント会議の説明は以上です。

(浜口講師) ご紹介いただきましたインタープリターズユニット森あそび本舗の代表をしております浜口祐子と申します。粟田さんからは行政側からの説明を頂いたが、私は活動団体と NPO 法人を運営しているが、任意団体である「森あそび本舗」の立場から、私達にとっての公園マネジメント会議とはどういう事を皆さんにお伝えしたいと考えている。

今日のお話は 3 つある。1 つめは、森あそび本舗についての紹介、2 つめは公園マネジメント会議との出会い、3 つめが森あそび本舗と公園マネジメント会議が関わる事で生まれた活動の事例を紹介させていただこうと思う。

本題に入る前に、インタープリターについて簡単に紹介したいと思う。

今日ここへ来る前に 3 時間ほど生田緑地の散策をさせていただいた。来たのが初めてなの

で、普通の客として歩き、葉っぱを色々と拾ってきた。これは全て生田緑地の中で拾った物だが、今日は手触りだけでどんな葉っぱか確かめていただき、ここにある葉っぱと比べて同じ形の葉っぱを探していただきたいと思う。

(会員による「さわって探そう」の実演)

(浜口講師) 普段、モリコロパークの中でこういった事をやっていますが、インタープリターというのは英語で「通訳をする人」という意味があります。これは英語や中国語やフランス語の通訳ではなく、「自然と人との橋渡し役」ということで、体験を通して自然のことを分かりやすく、そして楽しく伝える人の事を「インタープリター」と呼んでいる。

ここから本題に入りたいと思うが、私達インタープリターズユニット森あそび本舗とは、愛・地球博、森の自然学校というパビリオンで活動していたインタープリターの集まりである。実は、万博に来るお客さんは自然に触れたい、自然観察をしたいという人たちではなく、大体の人がトヨタ館のロボットが見たい、外国館のビールが飲みたい、そういった目的でいらっしゃる方が、どこの館にも入れずに仕方なく来たというのがほとんどだった。そういう方々に対して、私達はこういったゲームを行って自然に触れていただくという事を半年間やっていた。そういう経験から、自然にあまり興味がない方にも楽しみながら自然に触れ、親しんでもらう活動が必要ではないかという事で、森あそび本舗という団体を起ち上げた。

私達がいつも使っているフィールドは屋久島や白神山地などの大自然ではなく、近くの道ばたや公園などの身近な自然というところである。私達が団体を起ち上げるにあたり、1番大きな目標としたのは、万博の跡地に帰って活動したいという想いからであった。その結果、1年半後にはモリコロパークの中の「もりの学舎」という施設へ帰って活動を始める事ができた。それ以外にも行政とのコラボレーションや企業とのコラボレーションもやり、例えば愛知県が都市緑化の推進のイベントをやる場合の体験プログラムを提案して実施したり、アサヒビールにて美味しいビールを造るには美味しい水が必要という事から、水を育む森をフィールドワークにし、ビール工場の見学と試飲をセットにしたプログラムなども担当させていただいた。

最初は、身近な自然という所から始まった活動だが、行政や企業などとコラボレーションする所からもりの学舎の活動に繋がっていき、そして公園全体に広がっていく中でマネジメント会議と出会った。

2つめの公園マネジメント会議との出会いについて、私は準備会から参加させていただいているメンバーの1人である。最初に公園緑地課の方から参加の依頼があったが、まず思ったことは、もりの学舎という一施設に関わっているだけだったのが、今度は公園全体の運営に関わる事が出来るという期待感と、会議にお金も出ないのにボランティアで公園を運営するのかという疑問、そして行政の方、大学の先生、企業の方、色々なNPOの方が

いる、そんな色々な人が集まって話し合いが成立するののかという不安を持って参加した。実際に参加してみると、行政の資料は分厚い。それだけ分厚ければ、当然説明も長くなり、会議ではなく報告会になる。最初はモリコロパーク報告会でいいのではないかという印象だった。

準備会の大きなテーマとしては、運営ルールブックの検討ということだったが、実際には、ルールブックの案というのは行政側で作ってあり、それを何回かに分けて章ごとに考えるという話なので、はっきり言って面白くない。最初はつまらないと思っていたが、よく考えたら色々な考えの人がいる中で話し合いを進めていくと、ルールブックの案が非常に役にたったと、今になって思う。例えば、「会員」が誰を指しているのかを聞くと、団体の事なのか団体の代表者の事なのか、それとも団体の全員の事なのか、そういったところから話題が広がり、皆さんの中で議論が広まった。そういった意味では、運営ルールブックの検討を通して、皆さんの事を知る機会になったのではないかと思う。

実際にマネジメント会議の本会議が発足しており、メンバーも増えている。中々時間がかかるが少しずつ変わってきたことがある。まず一つは、説明よりもワークショップの時間が多くなり、話し合う時間に自分が話すことで、参加している意識が高まり、楽しくなってくるという事がある。また、1番良かったこととして、会員同士の間関係が深まるということがある。私達は、普段からコミュニケーションがとれていなかったため、それぞれの思いが理解されないまま進んでいた。ところがマネジメント会議の中で顔を合わせるうちに、そういった話も気軽に出来るようになり、理解し合えるようになったというのが、私達にとっては活動しやすくなった事のひとつである。

3点目だが、森あそび本舗とマネジメント会議が関わる事で生まれた活動を3つ紹介したい。1つめは、自主活動でモリコロパークおさんぽ de いきものみつけというイベントをやったが、これは東邦ガスが森あそび本舗の活動にもともと理解をしており、支援できないかという想いを持っていた。行政と企業で資金を用意していただいたり、企画広報などやっていただき、私達はプログラムの開発や人材の提供をしていくというようなかたちで進めていった。私達が「ハンディびょうぶ」という園内の自然を題材としたイラスト小冊子の開発をし、これを持ちながらお客様に公園の中を歩いてもらう、公園の中にある生き物をインタープリターと話しながら探してもらうという事で、最後に見つけた生き物をスタンプで押すことができるようなプログラムとした。これが非常に好評で、1日あたり400人以上の方に参加していただく事ができた。本当にたくさんの方に、公園に来ていただいて生き物を見つけるきっかけづくりが出来たのではないかなと思う。

2つ目は、合同分科会という事で、「新しい公共支援事業」というのがある。これは、池の調査をされている先生や土壌調査をされている先生がおり、そういう分科会が立ち上がっていながら調査の内容がどうなっているのかという話がありせつかならば公表するようなパンフレットを作ったり、なにかそれを活かした体験ができないかというお話があった。もともと公園の中でも散策路を整備する計画あり、設計までされていたが、お金がな

いたため整備されていない場所があった。そうした場所も、簡単に整備して活用してはどうかという話になり、色々な人が集まって、国の制度を利用してしまおうというところから生まれたものである。これは、今まさに自然調査をし、プログラムを開発途中で今年 3 月にモニタープログラムをやる予定である。

3 つ目になるが、「緊急時に備える実習分科会」ということで、震災を機に生まれた分科会である。行政側では震災時にどうするという管理計画があるが、実際に起こったときにしっかり機能するのかというのが疑問点である。施設管理者は管理計画をうけて実際のマニュアルをつくったりしているが、それもマニュアルに沿った対応を実際にやったことがないという所から、それぞれの施設管理者の方に問題点を洗い出してもらったり、活動している NPO としては、自分達のお客さんをどうやって誘導するか、そもそも避難場所がどこにあるのか、どのルートだと歩けるのか等、皆さんと一緒に勉強して実習を重ねている。こうやって机上でもシミュレーションをやったり、実際に公園内を歩いて何分かって避難できるかという様なシミュレーションもやっている。

今まで、それぞれの施設で行っていた避難訓練を、連携した形で行うことができるようになったり、活動している NPO の方々も、普段から危機管理意識を持ってやらなければならないという意識を高めるきっかけになっている。

最後にまとめとして、私達、森あそび本舗にとって公園マネジメント会議とはなんなのか。一言で言うと、自分達の活動がしやすくなる場だと思っている。これはモリコロパークお墨付きの活動ができると書いたが、ある団体が日本三大桜の二世を植えたいと言って分科会をたちあげたいという話があり、そもそも地元の樹ではないのに持ってきていいのかとか、他のところから持ってきたものは根付くのかとか、そういった問題が他の団体さんからあがってきました。それは行政とひとつの団体が話し合っても、決めて木を植えることは出来たと思うが、こうやって皆さんが居る場で話しをする事で、良い事と悪い事をしっかりと議論できる。最終的には、森のエリアではなく、広場として使っている公園の広場のエリアに、植栽の一つとして植えるのはいいのではないかとということで、皆さんに認めてもらえるというお墨付きの活動ができるという風に思っている。

また、色々な立場の人や団体と関わることで浮かぶアイデアや実現できる事もある。私達はプログラムのアイデアはたくさんもっているが、それを実行するための資金がなかったりチャンスがなかったりした。ですが、色々な形で関わることで、アドバイスもたくさんいただけるようになった。そういった意味で、自分達のアイデアを形にできる場ではないかと思います。

是非、生田緑地の皆さんも、マネジメント会議をうまく活用して、自分達の活動を広げていくきっかけにしていただけると良いと思います。

(意見交換)

(コーディネーター) 愛地球博というのは、2005 年に始まったが、それより 10 年くらい



前から色々な揉め事があった。その揉め事により色々なセクターの人たちが博覧会に関わることができ、セクターを越えた話が出来た。最終的には開催し、更に色々な団体が加わって成功し、公園が残ったという形である。

その公園も多様なセクターの人が関わり運営していくということで、マネジメント会議が立ち上がった。その基本は、色々な市民が主人公であり、それに関わる主体や主人公が対話の中で繋がっていくことであり、非常に大事だと思う。

私達は今度、生田モデルというものをつくっていく。生田緑地において、これまでずっと流れてきたことを元に展開していくことになると思う。

先進事例として、教えていただきたいことがあれば、聞いてほしい。

(会員) 愛知県の方に、伺いたいことがある。

1つは公園の中を活性化させるためのマネジメント会議なのか、公園を1つの核として活性化させながら地域に発信をし、まちづくりに結びつけていくものなのかを聞きたい。

2つめは、この公園は昔から愛知自然公園であり、新しくリニューアルした公園だと思うが、マネジメント会議をやる前から既存の団体の方があったのかというのをお聞きしたい。

また、NPOの会員が鰻登りに延びてきているが、昔から活動してきた人たちがコアになったのか、この公園に関係ない方々が集まって出来たのかというのをお聞きしたい。

最後に、行政、指定管理者、NPO、大学研究機関、企業とあるが、自治会や地縁団体などの地縁組織等は含まれていないのか。

(栗田講師) まず、我々のマネジメント会議の目線は公園の活性化である。これは地域特性に関係するが、モロコロパークは市街化調整区域であり、隣接したところに住宅地がないという特性がある。

2つめの会員の推移については、ご質問のとおり、NPO会員が増えている。青少年公園は青少年の健全ということを目的に、当時は行政もしくは行政に関連する団体が主体となって公園の管理運営をしていくというスタイルだった。具体的にはNPOが主体となっているプログラムが、全て直営になっていた。そのプログラムの中に、大学生なども入っていたが、その親分は全て公園の管理者であったり、学校の先生であったりしていたため、土壌的にNPOが活動する土俵がなくても完結していたと思う。従って最初の36会員はほとんど万博後に、みんなに知ってもらいたいといって入ってきている。

そこから徐々に、会員が活動を通じて、会員が会員を呼ぶようなスタイルとなっているが、今の新しい会員は、万博の頃は万博で活動していない。誘われて面白そうなので入ったというように、目線が変わってきた会員も増えており、モロコロパークでお客さんに喜んでほしいという会員が増えてきている。従って現在、地縁組織は入っていない。

ただし、地元の長久手市のまちづくりを推進していく課がメンバーになり、色々な人や地域とつながろうという取り組みをしている。

(会員) 会員は団体が中心という話があったが、利用者目線でマネジメント会議を運営していく一面も必要ではないかと思う。

(栗田講師) 基本計画では、マネジメント会議の将来に向けての取り組みについては、県民の目線を入れてある。将来的には県民の方も仲間に入っていただき、マネジメント会議に取り組みると言うことで県民を位置づけている。

ただ、今我々が取り組もうとしているのは、利用者に対してのサービスの促進についてだが、個人ユーザー単位でお客様にサービスを提供してくれる方が少ないのではないかと、議論にのりにくいのではというところがあり、最初は個人の会員を抜いている状態である。ただし、個人でも活動したい人がいるため、拾えるスキームが必要なのではという意見もあった。

そのため、地球市民交流センターという施設に限って言えば、パートナーという関係になっただけ、そこから公園の利用の仕方、公園の仕組みを知っていただき、いずれはマネジメント会議に入っていただく仕掛けを、次のステップとして考えていくべきだろうと考えている。

(会員) 行政が5から3に減っているのはどういう事か。

(栗田講師) 機構改革のためである。行政セクターのうち、新たな役割を無理やりつくり、無くなったものは無くなり役割を補填する組織はいまも残って存在しているという状態。

(会員) モリコロパークの自然について伺いたい。今までの話から理解すると利用を制限しなければならないほど、重要な自然や動植物のない公園だと理解してよいか？それとももっと大事なものがあつた時には、どういった対応をしているのか。

(栗田講師) 現実には、いわゆるレッドデータブックに載っているような希少種はあるが、それに対しての利用制限はかけていない。ただ、プログラムのサービスという意味で言うと、咲いている時期が限定されているものは限定的にガイドツアーとして、観察員同行で見せていただいている。それ以外は、立ち入る場所ではないところに希少種があるという状態。例えば、園内にもギフチョウという蝶がいるが、卵を産み付けるカンアオイ(ヒメカンアオイやスズカンアオイ)は公園内いたるところにある。これに利用制限をかけると事実上公園自体に立ち入ることが出来なくなるため、この場合はカンアオイ(ヒメカンアオイやスズカンアオイ)があつても利用制限をかけずに入っていたり、ギフチョウを見ていただける空間を解放している。

(会員) 4つほど伺いたい事がある。1つは、浜口さんの資料に書いてあるNPOは何のことか。「インタープリターズユニット森あそび本舗」という組織と管理運営の委託を受けているNPOがあるという話だが、話を聞いていると森あそび本舗がやっているように見えた。また400人の方を受け入れるような大がかりなプログラムを一体何人くらいで、どのくらいの時間を掛けて準備しているのか。さらにそれに対して、行政は、どれくらいの人で、どれくらいの時間を掛けて、企画広報やNPOとの調整を行ったり、実施費用を調達するための書類書きをしたりしているのか。例えば、皆さんがどうやってエネルギーを注いでいらっしゃるのかというのが気になった。生田緑地の場合は、ほとんどがボランティア団体

で、マンパワー的に限界がある。NPO で職員のように普段公園にいるボランティアなのか。時間があまりとれない人が相当数を占めるようなボランティアだと出来ることは全く違ってくる。そういった部分で、新たな活動をするのはどうなのかというところある。

2 点目は、この手のことは、生田緑地でも自然調査団が行政とコラボしながら行っているが、マネジメント会議でなければこういう事ができなかったのか。

3 点目は、マネジメント会議の会員になることは、実質的な活動の為にどんなメリットがあるのか。これだけの団体が入って活動するという事について、何のメリットがあって行っているのかという事が知りたい。

4 点目は、企業の方が結構入っていて、お金を出しているように見受けられるが、一体どのような仕掛けで入ってきているのか。

また、マネジメント会議に入らなくても、施設を利用することはできるのか。例えば公園でイベントをやる事は可能なのか。

(浜口講師)「森あそび本舗」という団体は、最初は「もりの学舎」で活動したいという想いから任意団体として起ち上げた。最初の運営の受託というのは、森あそび本舗ではなく、万博当時から運営していた社団法人が受けており、私達はその下でメンバーとして働いていたという形である。県としては、運営が環境部、建物の管理が建設部という非常にややこしい施設だが、運営に関しては、環境部は将来的に地元が NPO を起ち上げて運営して欲しいと思っていた経緯がある。

社団法人は東京だったが、地元の間が経験を積み、実際の NPO を起ち上げてほしいというルールがあった。実際に活動しているインタープリターというのは、森あそび本舗のメンバーだけではなく、愛知県の養成講座を受けた方が 60 名ほどいらっしゃるが、その方々が中心にやっているため、それをとりまとめて NPO を起ち上げる支援をさせていただいた。

いまの森あそび本舗というのは運営の中に入っているわけではなく、主に公園の中での自主活動というのが中心になっている。私は NPO の職員としてもそこでお仕事をさせていただいているが、実際は 2 つの団体が別々にやっている。

「おさんぼ de いきものみつけ」は、プログラム作成に掛ける時間は大体半年くらい。第 2 回までの間、物を作ったり中身を作ったりするのは 3 ヶ月ほど掛けている。プログラムは、コアでやっているメンバー 2、3 名。仕事としてやっている人間と、ボランティアとしてやっている人間と半分半分である。当日のインタープリターのスタッフは 12 名から 14 名ほど、実際には 5~6 時間程度かけて 400 名以上の方を対応したという状況である。行政の方は、1 番多いときは 6、7 名の方が関わってくれたり、通常の打合せにも顔を合わせてくれたりしていた。企業の方も 1、2 名の方はいつも来ている状況。

(粟田講師) 行政としては、記者発表を行ったり、新聞社にもプログラムの内容を取材してもらおうように、段取りをとり、さらに新聞折り込み等を直接お願いして一緒に取材の対応に入り、同行取材をしてもらった。

当日のプログラムはすべてお任せだが、それでもお客さんがプログラムについて知らな

い方がいるため、公園入口部でチラシ配りをおこなった。そういう部分で出来ることをサポートさせていただいた。また、事前のモニターの試験チェックをしたいという事があれば、トライアルチェックに協力した。行政らしくない行政の手伝いをしたかもしれないが、出来ることをお互いに考えながらやった。

(会員) 浜口さんがおっしゃったのは結局、NPOとしてこれをやったのか。

(浜口講師) 「おさんぼ de いきものみつけ」に関しては、森あそび本舗がプログラムの開発を行った。現場のインタープリターは、もりの学舎で登録している方に活動してもらうというのが条件にあったため、NPOは現場でインタープリターを手配する部分、つまり当日の運営に関わっていた。

(会員) NPOの職員としての労働もし、かつボランティアの森あそび本舗としての活動もしたという事が位置づけにあったのか。

(浜口講師) 今回の「おさんぼ de いきものみつけ」に関して言うと、私は行政側の仕事はやっていない。森あそび本舗としての活動のみを行った。そのもりの学舎のNPOとしての仕事は私以外の人間が全部行っている。

普段はNPOのメンバーとしても関わっているが、そちらでは「おさんぼ de いきものみつけ」に関わるお金はまったくいただけていない。森あそび本舗としての活動をし、企業から出していただいた資金の中で動く部分と、ボランティアで動いている部分もある。

「おさんぼ de いきものみつけ」は、行政の中では2つセクションがあり、公園緑地課ともりの学舎の運営を行っている環境部がある。企業の中でも環境部の支援をしたいという話があったが、当時話を受けた担当者がとりあわなかった。私達としては是非やりたいという気持ちがあったため、栗田さんに相談し、事務局をやっていただいた。県の中で色々なセクションが担当として集まることはあまり聞かないが、あえて建設部と環境部に同じ席に入ってもらった。そういう意味では、マネジメント会議でなければ出来なかったと思っている。

(栗田講師) 公園マネジメント会議はきっかけである。複数の方が連携して、公園でやりたい事などの相談を解決する方が、遙かに能力も時間もかかる。しかし、そこでのことをマネジメント会議で議題にしたりしている。そういう関係性がないと、公園マネジメント会議で何を議論して解決すれば良いか分からない。

個々の活動の方とお付き合いをさせていただく事で、モリコロパーク以外の公園などで繋がっていく。そういったお手伝いをする事で様々な問題点が見えてくる。公園マネジメント会議の事務局という部分と行政として協働のパートナーとしてどういうことが実現できるか、相談された事について知恵を出すというのが大事だと思っている。

(浜口講師) 普段手に入らない公園全体の情報が集まってくる事が一番大きなメリットである。会議に参加することで、公園の来園者数など細かい情報から基礎的な情報まで得られる。そこから、誰に話を通したら活動しやすいのか等も分かってくる。

(コーディネーター) 先程の建設部と環境部と一緒に話すことができることもメリットか。

(浜口講師) そういった部分も含まれる。

(栗田講師) あまりメリットを意識していないが、少なくともメリットではないのは、管理費の低減に繋がらないという事。役所の財政当局は、維持管理費の低減に繋がるというが、実際は繋がらない。ただし、本来お金がかかる部分がかからなくて済む可能性はある。行政のメリットという意味では、公園マネジメント会議がモリコロパークにとって「こんな貢献をしてくれている」という説明をすることが出来る。また、公園緑地課としてのメリットは、普段ではお付き合いできなかったであろう会員と繋がりができ、それにより、できないと思っていたことが、出来るようになったことが多かった。この2年半で私自身の人生観も変わったし、行政に対する会員の考え方も変わった。

(会員) マネジメント会議を通して、企業は何を求めてくるのか。NPOと企業は中々難しい点もあると思うが、その辺りはどうか。

(栗田講師) 非常に難しい質問。我々も仕掛けている最中である。ただ、ここに入っている会員企業は、実は大きく半分に別れる。1つは公園の維持管理のメンテナンス業者など、何かしら公園と関わっている企業である。公園マネジメント会議に興味を持っていただき、お手伝い出来ることがないかということから入っていただいた。もう半分は、公園マネジメント会議を通じて、NPOとうまく繋がれないかとか、元々プログラムを提供したいと思っている人たちである。ビジネスツールとして公園マネジメント会議なりモロコロパークなりに貢献したいと思っていたのではない。

(コーディネーター) CSRとして入る方はいるのか。

(栗田講師) CSRとしては盛んに仕掛けているが、社会貢献は、マネジメント会議という継続的なメンバーではなく、特定の取り組みとして点と点で繋がっている、例えば、行政とA社がCSRで繋がっているというのが現状である。

(コーディネーター) 以上でモロコロパークの事例を元にした質疑を終えたいと思う。第二部の方で、更に生田モデル、生田緑地について、マネジメント会議の目的やルールについての議論に入りたい。

(休憩 10分)

## 第2部会議 運営ルール作成に向けて

(事務局：資料説明)(省略)

(管理運営協議会会長) 生田緑地では、「生田緑地を守り高め広める事の重要性」について、また、それを担っていく団体として立ち上がった組織。市民とのネットワークを築いた上で情報の共有化と生田緑地の魅力を広く発信することを目的とした組織となっている。

会の結成当初は部会をつくり、全体会議を2、3ヶ月に1回程度行い、生田緑地に関係した情報の共有をしていた。これまで交流のなかった人同士で交流が出来るようになったり、生田緑地憲章の看板を設置しようとか、もみじ谷にビオトープを作ろうということなどを行った。現在、「もみじ会」という組織が行っている。

構成団体は、市民団体や行政管理機関などたくさん入っている。市民団体には緑の関係を行う団体もいるが、民家園の中のボランティア団体や向ヶ丘遊園跡地を考える団体、地域のまちづくりに関わるのぼりとゆうえん隊という団体が入っている。

最近では、守る系の活動として犬の散歩について気になっている状況。殆どの方はマナーが良いが、ごく一部にあまりよろしくないマナーで散歩をさせる人がおり、これが不快感につながっている。これをどうすればいいかという事を考えるところである。生田緑地で開催された大きなイベントの時に、チラシを配布するところまでしか行っていないが、そういう事をやったりしている。守る部会では生田緑地を知っていただくクイズを作成し、色々なイベントでやった。また、高める部会で、生田緑地は出入り口に名称がなく、あちこちに抜け道がある状態。待ち合わせをした時に共通の名前が出てこない場所があったりしたので、15箇所くらいに名前の提案をさせていただいた。実際にはほとんど採用されていないが、看板は設置されることになった。

生田緑地内での色々な不具合について意見交換をしたりしている。広める部会では、生田緑地を知っていただいたり、森林ウォーキングをやったりしている。また、生田緑地内で行われる工事等の意見交換、情報交換も行っている。

HPが最近でき、生田緑地について色々で紹介されており、ブログがあるため私的な意見を載せる事もできる。森林ウォーキングの様子が紹介されたり、行政からの説明会のお知らせでは、広報誌に載せる程でもない工事等の説明会も、会員はメンバーリストに希望すれば入れるため、スムーズに情報が得られる。また民家園通りという商店街のお祭りでお店を出し、行政職員と市民とが連携している。例えば見つけたカブトムシを持ち帰らずに見守るといった生田緑地のルールを楽しく紹介した。子供向けのスタンプラリー的に行ったが、実際には後ろで聴いているお父さんやお母さんへのメッセージがメインであった。ただし、うまくいっていない面もある。活動の予算の受け入れもないので、中々難しい。植生管理協議会との連携もできていない。忙しい市民と忙しい部署の集まりのため、動こうと思っても動けない。さらに行政の中では、市民がネットワークをするための組織という位置づけになっており、私達は協働のために参加しているが、そのように認識されていないという大きな問題点がある。

生田緑地ビジョンに対する勉強会の中で、モロコロパークがよく引き合いに出される。一体何が違うのか整理した資料をお渡ししているので、議論の参考にさせていただきたい。

(植生管理協議会会長) 私は雑木林勉強会という会員から出ている。植生管理協議会は6つの団体と多摩区道路公園センターの計7つの団体から構成されている。その構成してい

る団体として、雑木林勉強会、これは他の公園に見学に行く会である。また雑木林を育てる会、これは雑木林の植生管理をしている会。谷戸とホトケドジョウを守る会はホトケドジョウを守らなければならない事態になり、その時から活動している団体である。またかわさき自然調査団は、一番大きな団体で市民部会の事務局もやっている。飛森谷戸の自然を守る会は南の地域の関わりの強い活動である。生田緑地ホタルの里の畑を守る会は、のらぼう菜作ったりする活動をしている。この 6 つの団体と道路公園センターから成り立っている。

先程のモリコロパークと決定的に違うのは、非常に大事な生物が生きているのが生田緑地の特徴である。ここでは植生管理協議会と名前がついているが、自然全体に対して責任を持って活動している。出来たのは 2002 年だが、1997 年から植生管理について活動しており、その前身なる活動に基づいて 2002 年から活動している。

活動内容は、生田緑地の 1 つの場所で銘々違う目的で異なった管理を繰り返していたら、どんな生き物も住めない場所になってしまうため、植生管理協議会では自然の中で操作しやすいものである植生を中心に、生田緑地の自然を、市民と行政の協働によって管理する事を目的として、植生管理計画をたて、この計画に基づきそれぞれの団体の活動の調整を図ってきた。

2006 年からは、植生管理に多くの市民が興味をもち参加できるように市民部会（里山倶楽部）を作り、現地主義で活動している。市民部会には A と B のふたつの活動があり、A は雑木林をすべて伐採し、若返らせる場所を作り、1 年間雑木林と関わる体験をしてもらっている。B はその日毎に集まった人によって、植生の楽しさが分かち合えるような植生管理の計画を立てたり、順応的な管理を行っていくための管理を行ったり、実際に管理を実施したり、勉強会を行ったりしている。

会は年に 4 回が基本で、その他に臨時会を行っている。市民部会は月に 2、3 回開催している。

大事な点として、この中の団体のどこかが活動している場所が、植生管理協議会の対象というわけではなく、全体が植生管理協議会の対象である。全体について計画を立てて実践していく。行政との協議の中でも全体の自然について考えて発言し、実現している。

（事務局：資料説明）（省略）

（意見交換）

（会員）10 分や 15 分しか議論をしないで、今日の会議の内容は終わりという事にならないか。再度もう一度 1 時間なり 2 時間なり、今日と全く同じ目的の会を設けてくれるのか。

（コーディネーター）当然、私もそう思う。今回は情報をとったという形になると思うが、どうか。

（事務局）議論しなければいけない事が決まっている中で、予定の時間内に終わらない事

はよくあること。飛び出した分は必ずやって次へ進んでいく。今のご質問については機会を設けるということである。

(コーディネーター) こういった会議はプロセスが重要である。次にスタートを切った議論をやる時間があった方が良いと思うので、よろしくお願ひしたい。

(会員) モリコロパークとの違いを例えると、モリコロパークは新興住宅地の自治会で、生田緑地は旧地主のいる場所に新しい住民が入ってきた自治会。新興住宅地はスタートラインが同じなので、やりやすいが、昔の地主がいる場所は、後から入ってきた人ははじき飛ばされるようなものが多い。改定するためには、旧地主のいる自治会は新しい人の意見をどんどん取り入れて、事によっては体制の入れ替えをしていくことでうまくいくように思う。

生田緑地は70年前に都市計画決定がされたにも関わらず、公園として作らなければならないビクターセンターが今年出来る。30年近い活動をしている自然調査団や、17年、15年の市民団体がすでにたくさんある。そういった中で、生田緑地全体を見直していく場が設けられた。

これは必要なことであり、自然系の情報を共有できないと資料づくりの中でも限界を感じ、管理運営協議会の限界を感じる。そういった部分が、発展的に良い方向に向けばよいと思う。

(コーディネーター) 管理運営協議会のご意見だと思うが、植生の方はいかがか。

(会員) そもそも資料を見ていくと、マネジメント会議は第3の協議会を目指しているのか、生田緑地を総括する唯一の協議会を目指しているのか、はっきりしてもらいたい。

(事務局) 生田緑地ビジョンができ、その中で協働のプラットフォームというのが位置づけられている。二つの協議会があるが、事務局としては再構築をした後、生田緑地マネジメント会議の中で一本化したいと思っている。

二つの協議会の目的や理念などは継承しながら、ひとつのものにしていけたらと思っている。

(会員) 最初の準備会の時にも伺ったが、3つの円でマネジメント会議の範囲を示しているが、植生管理協議会の立場では、生田緑地の自然全てを守って、将来にわたり、今生きている生物とその棲息関係を保全したいと思っている。必ずしもこれだけではなく、占有許可や使用料徴収は別として、生田緑地のすべてのこと、自然に関わることについては、唯一の会議をつくるのであれば、決めたことが守られるようにしてもらいたい。

生田緑地整備構想策定委員会の時に、座長役をしていた先生から「生田緑地の木の枝一本切るにも許可が必要」というものを作ってはどうかという提案があったが、いま考えるのであれば、そこまでの権限をもった協議会をつくるべきではないかと思う。

協議会で決めたことは、行政の様々な事業で守られなければならないという状況にしていきたい、そういった会議を目指していきたい。

(コーディネーター) マネジメント会議が唯一の生田緑地に対する会議体であるならば、



単に意見を交換し、言い合う会議ではなく、特に植生管理に係ることについては全ての権限をもつ会議にするべきだというお話であった。

このマネジメント会議を、第3のオルタナティブな会議にするのか、唯一の会議にするのかということをご皆さんで共有しなければならない問題であるし、唯一の会議とするならば、権限はどこまでなのか。例えば管理や運営や整備といった分野に対してどうなのかという、根本的に大事な枠組みであると思う。これについてご意見はあるか。

(会員) 個人的には、唯一の会議にすることがいいと思う。その理由は、一つのあるべき姿に向かって取り組みをするという段階で、考え方のベクトルが少しずつ違っていると、最後のあるべき姿に到達するまで時間がかかる。また、あるべき姿に持って行こうとするときに、組織についての議論が必要になる可能性がある。いまここで議論するのであれば、新たな組織を作る方がいいのではないかと思う。実際に我々が対象とするものが見えてくると、いまの議論が深まっていくのではないかと思う。

愛知県はお客様の視点、つまり顧客サービス、顧客重視という視点をいつ決めたのか、また、そのことを確認してから、色々なルールを定めていったのかどうかを聞いたかった。そうした熟度の問題で、初めて行政計画としてどこまで盛り込めるのかが変わってくるのではないかと思う。

(栗田講師) 準備会の段階で決めているが、現在も揺れている。問題はそう言うことが会議体として担えるか、担い手がいるかという部分である。

我々は、指定管理者という人間がいるが、管理計画は公園管理者が作っている。公園管理者と指定管理者が担う以外に、助言やサポートがあっても、会議で議論しここで決定する、ここで扱うといった内容があるかどうかという部分で揺れている。もう少し踏み出した方が良いのか、今ぐらいの方が良いのかという事は常に問いかけながら進んでいる。まずは運営の部分を中心にするということは準備会で決めた。

(コーディネーター) 先程指摘された点だが、お約束したとおり、今の議論は引き続き、次の会議でお願いしたい。

今日ここで出たものは、「マネジメント会議自体は第3のものか、唯一のものを作り出すのか」ということ。「唯一のものを作るのであれば、その会議体は公園緑地に対してどこまでの権限を持っているのか」、また、「その会議体は何をターゲットにするのか」という3つの課題が出たと思う。これについては次回の会議で議論していただけたらと思うし、次回までに考えてきていただければと思うので、宜しくをお願いしたい。

以上